碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可
神奈川　碩心会　発行

59年8月号（145号）
発行者
根岸岳萃
編集
中村愛岳

59年8月現在会員数

逗子地区	169名
葉山地区	297名
大船地区	63名
（合計）	（529名）

日々思う事

桜山A支部　荒木　笙風

人それぞれに顔の異なる如く、価値観も違うので、生き方・倖せ度の感じ方も違うと思いますが、私は詩を吟じつゝ、健康で平和な日々に感謝しながら生きております。

昭和十九年四月、私と四才の長男は、北満の斉々哈爾市に於て、主人を一ケ月の教育召集との事で、ソ満国境の海拉爾市に送りました。そして主人不在の十一月に長女を出産しました。翌年敗戦となり、平和で倖せに満ち足りた生活から一変して、略奪と、敵視と、貧困の苦しく悲しい毎日となりました。チチハル市は日本人集結の最北端でしたので、肉親とちりぢりになり、哀れな姿で奥地からやっと辿りついた人々、傷病の為、ソ聯より送還された片手・片足の兵隊さん達が、ただ引揚の日、日本に帰れる日を夢見つゝ、越冬を覚悟し、助け合いました。しかし、零下四〇度の極寒で、暖もとれず、栄養失調で多勢の人達が満豪のどことも知れず埋もれてゆきました。私達親子も此の地で…と幾度も……。

人間の値打ちは最後の土壇場で、どのように身を処するかで定まると思います。最低の生活になった時、周辺の方達の人間性もよく分りました。自決する人、狂う人、発奮して勇気を出して働く人、色々でした。私はたゞ、どんなに苦しくとも、二人の子供と日本へ帰れる日まで生きようと、子供を抱え幾夜も泣きました。

二十二年七月、引揚げが開始され、無蓋車で、そして鉄路の切断されているところは、蟻の這うように、長女を胸に、長男は紐で体をつなぎ、団体にはぐれたら死ぬだけと、ひたすら歩きつゞけました。朝にお碗一杯のコウリャン米のおじやが支給され、略奪等色々の悲しい出来事にあいながら野宿し、チチハル市を出て四ケ月目の十月十四日、ようやく日本の土（博多上陸）を踏むことが出来ました。検診と手続きで三日後故郷鶴岡へ。疲れ果て、やせ細った私達三人を見て、母は「よくもよくも…」と涙で絶句してしまいました。

四年間、父母の許で過し、元気を取り戻しましたが、人伝てで、ハイラル市は全滅と聞き、諦めかけていた主人が、二十五年八月シベリヤから復員してきて、親子四人がやっと再会いたしました。

昭和二十六年、逗子に参りました。敗戦の北満での苦しい生活があったからこそ、貧しくても、非常に倖せを感ずる日々でし

た。働ける喜び、子供の成長があり、充実した躍進の日々でした。そして昭和四十六年前々支部長の早瀬様のたってのおすゝめで碩心会に入会し、詩吟を始めました。しかし、その年十一月、思いがけず主人が他界してしまいました。

早いものであれから十三年余…よくもこの年まで生きてこられたと思います。今は長男夫婦と孫三人、一緒に賑やかに暮すことができ、健康で働ける喜びに手を合せ、老後の為にも一層吟に親しみ、精進して参るつもりでおります。

三井先生、教場の皆様、碩心会の皆様、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

県大会参加の喜び

岩崎恵岳

県本部創立三十周年記念吟道大会の朝が来た。県民ホール前は人の出入りがはげしく、中に入ると一、二階はもうすでに満席、三階に席を取りホットひと息。

大合吟が進むにつれ、会場の熱気はいやが上にも高まり、やがて構成吟「かながわ詩情点描より」が始まる。溢るゝ名調子に、会場は私語ひとつなく静まりかえり、吟と舞とがまさに一体となり、終って会場からおこる拍手にしばし暑さを忘るゝひとゝきであった。

愈々式典に移り、次々と入場する支部旗が舞台いっぱいに並び、今更乍ら岳風流の発展に胸熱くなる思いがした。全員起立で県本部詩の合吟がホールいっぱいに韻き、つゞいて常盤本部長の挨拶があり、今日の三十周年の喜びと、「人の上に立つにはおふくろ、胃ぶくろ、堪忍ぶくろの三つの袋を大切に」との訓を説かれた。又理事長松井先生は、今年岳風先生の三十三回忌をすませた事、県本部創立当時の思い出を交え、当時まだ四十代の若さだった事など感慨深げに話された。次に長年吟道発展に力を尽くされた松井、常盤、新田、根岸他の先生方に感謝状が贈られた。つゞいて高令者の表彰、皆伝以上への許証授与が行なわれた。そして来賓の河合岳桐先生より祝辞をいただき、「年を取って声が出ないという話を聞くが、吟は声の良さばかりでなし、節の良さでもなく、詩の内容を心の底から吟じるように」とのお話をいたゞいた。

式典が終り再び吟に戻り、招待吟の素晴らしさに聞き惚れるうち、時間が迫り、残念乍ら役員吟詠は急拠合吟となりました。最後の力強い万才三唱に次の三十五周年を約して無事県大会の幕がおりました。

昇伝（段）おめでとうございます

左記の方々が県大会の当日許証授与されました。

（皆伝）59年5月1日付

秋元粱岳　森田嶺岳　杉山雪岳
根岸秀岳　松野宝岳　山口夕岳

（十段）59年7月1日付

小峰桜岳　井沢潮岳

中国友好の旅参加（9名）

加藤岳相　千葉劒岳　千葉香岳　村田瀞風
佐竹梢風　石津祥風　石渡啓風　井上尚風
安田寿風

県本部吟行会（長野）

全国大会参加（36名）

加藤岳相　沼田洸岳　中村幸岳　千葉劒岳
千葉香岳　森田暁岳　根岸秀岳　森田嶺岳
秋元粱岳　渡辺秀岳　綾部秋風　村田瀞風
笠原珠風　伊藤峰風　白井寿風　白井麗風
石井庸風　佐竹梢風　安田寿風　久保田伸風
平山栄風　高橋栄風　重松由風　行谷佳風
伊藤朗風　森　貞風　田中明山　松井正山
大屋正山　古田真越山　三壁照山　嶋村幸山
高橋祥泉　向笠琴泉　金子輝泉　長島正子

碩心会寸評

会長　根岸　岳萃

碩心会が皆さんのご協力で大きく発展しておりますことは誠に慶びに堪えません。ところで当会には、ご夫婦で吟道に励んでおられます方が二十数組もございます。皆伝の方を列記しても井沢潮岳ー鈴風、加藤圭岳ー美山、中村幸岳ー愛岳、千葉剱岳ー香岳、森田嶺岳ー暁岳さん等々。中には根岸秀岳（治岳）、佐久間爽風（溪岳）さん等吟道習練半ばにして、ご夫君に先立たれた方も居られますが、今度三姉妹のご夫婦が誕生しました。堀内Bの一ノ瀬英風ー汀風、逗子Aの高橋城山ー華山さんに新たに中山潤ー俊江夫妻が入会されたのですが、これは全国的にも稀な例といえるでしょう。夫唱婦随ではなく夫唱婦唱とでもいゝますか、兎も角ご夫婦で楽しく吟道に励んでおられる家庭は、至極円満（当会の皆さんを見て充分実証ずみ）又親子は松井岳洋先生を始めとして十組以上居られますし、ご夫婦、親子組合せて当会の会員数の一割以上、会の発展に大変協力戴いていることにもなります。

前記高橋さんご姉妹のこと、まだご姉妹がいられる由、三姉妹、五姉妹へと発展されたら、すばらしいこと。一寸期待したいところですネ。他の方も奥さんを、或いは又ご主人を誘って吟道を楽しまれたら如何でしょう。

（附記）夫婦カップル23組は55年5月号にさわやかニュースとして御紹介しましたが其の外に同一家系で復数参加の方が数多くいられます。中でも（七人）参加の西岡玉風さん御一家を紹介いたしましょう。

（西岡玉風）
- 長男妻（西岡清山）ー（西岡大山）
- 次　男（西岡嵐山）ー（西岡よろこ）
- 長　女
  - （若林翠泉）
  - （若林藍泉）

連吟メモ

。詩吟といえば漢詩を吟ずることであるから、当然教場では「漢詩」ということばが出て来る。ところで「漢詩」ということばを口にする場合、少々心得ておいた方がいいと思うことがあるので、このメモに入れることゝした。

。その一つ。本家中国「漢代の詩」を指して、ずばり漢詩というのは当り前のことである。しかし、漢代（前二〇二ー二二〇）およそ四百年間の詩といっても、実は現在の新教本に出ているのは（垓下の歌）と（大風の歌）の二詩だけである。もともと漢代の詩は、作者不詳の民謡とか歌謡とか称される民衆詩「楽府」（がふと読む）が主で、その内容からいって、今後もこの二詩以外は教本に出て来ないと推察される。ちなみに、垓下の歌も大風の歌も、いわゆる漢詩ではなく、詩形からいって歌謡とされている。なかでも大風の歌は三句であり、教本にある四句目は、吟詠に適するよう三句目を繰り返したものである。

。漢詩は、中国においてはおゝむね三千年の歴史をもち、世界の古典とも称されている。今日われわれが平常使う「漢詩」ということばは、無意識のうちに漢字、漢語による「中国の詩」ということで理解しているが、なお次のような変遷がある。

。日本の現存最古の漢詩集は「懐風藻（そう）」（七五一）であるが、その当時から明治の後半までの千百数十年にわたり、漢詩は日本の言語、文化の発展に大きく寄与した。そしてこの間漢詩は、一貫して単に「詩」と称されて来たのである。ところが、明治の世となり西洋式のいわゆる新体詩が盛んになると、いつの間にかこれに「詩」の座を奪われてしまった。そこで、やむなく「漢詩」と名乗りを換えたというしだいである。

第９回　温習会会計報告

59. 6. 3 於図書館ホール　　碩心会企画部長　千葉香岳

	摘要	金額	備考
収入の部	碩心会．会計部より	153,765	
	寄附	10,000	逗子Ａ支部金指萌風様より
	計	163,765	
支出の部	プログラム代	74,800	550部
	会場費	3,750	
	会議費	2,100	打合せ・プロ編成茶菓代
	コンクール関係	64,415	
	優勝カップ1		
	トロフィー1.及楯2	43,215	
	優勝カップ用ペナント	200	2本
	カップ他の代金送料	500	
	佐藤岳誓先生に礼	2,000	
	副賞25品代	18,500	写真額及写真
	揮毫礼及紙代	3,000	中村幸岳様，村田瀞風様
	コピー代	3,490	
	消耗品費	660	
	煎茶	1,200	400g
	ジュース代	10,000	当日役員に支給
	松井先生及ホール役員弁当	1,350	3人分
	計	163,765	

（訂正）

651 森久美子　電話番号五七ー〇五六二に

（入会）

657 小野佐智子　逗子市久木七ー一五〇六ー五（逗子A）㊀〇四六八ー七一ー七八一一

658 加藤修山㊁葉山町堀内五〇一（平松）㊀〇四六八ー七五ー四一六二

（退会）

383 小峰純泉（諏訪）　423 木内　茂（唐木山）

426 坂東和喜子（大船A）　427 堀内伝治郎（大船A）

580 石川栄子（平松）　581 松井マス（平松）

お多福の訓

一、目が細いこと
　人の悪い所を見ない心

一、口が小さいこと
　人の悪口も自分の愚痴もいわない心

一、髪の毛をきれいにくしけづり真中であけてあるのは
　礼儀正しく中道円満の心を表わす

一、目の上の黒い所は角を取ったあと
　嫉妬（しっと）心をおこさず人の幸福を喜ぶ心

一、鼻の低いこと
　我をなくすればあらゆる事に感謝できる心